

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	角笛 : 文苑
Author(s)	柳影
Citation	龍南會雜誌, 50 : 61 - 63
Issue date	1896-11-15
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/4643
Right	

泉

足曳のみ山の泉夕されは月より外に訪ふものもなし

扇

忠と義をやかて扇の要にて日毎にあふけ君か御稜威を

竹

碓川の岸の弱竹なよくと世のうきふしをみすにくらすか

庭菊

江津子

あれはてよさひしき賤か庭の面に千代をかさせる白菊の花

秋風

露はるふ野路のしの原音たてよ夢をとろかす夜半の秋風

月あかき夜鶉のなくをきよて

哲人

なきもまたさやけき月にうかれけんねくらはなれて鶉のなく

角笛

柳影

大空きよく雲たかく

けさより霧もたちぬれば

峰の松風音かはり

浮世の秋はかへり來ぬ

山もと近き牧の野は

桐の一葉の落ちてより

夜毎にすたぐ鈴虫の

こゑもかれ野となりにけり

野もせに遊ぶ小羊を

こゝろがまへてまもりつゝ

さゞれ小川の岩かどに

うちやすらへる男あり

笛と杖とをさしたきて

犬のかしらをかいなでつ

思ひのさまにふしえづむ

彼れはなにをうかこつらん

『人はけものどそしれども

汝れも心のあるならば

ちぎりたえたる我戀の

はてをわはれと思へかし

思へばあはれかの君を

花の木蔭に見てしより

戀の道芝ふみわけて

忍びし事もいくそたび

えげきうらみを身にうけて

君もあはれと思ひけん

玉手さしまき諸共に

かはらじものどちぎりしを

人の心は色みえで

うつろふ花のためしには

君がやさしきこゝろねも

もれせざりけむ淺間じや

かたみにそでをえぼりつゝ

ちぎりたきてし言の葉も

今は水泡と消えうせて

中のかけはしたえにけり

かひなきものと知りながら

きつゝなれにし花衣

うらみはてゝも恨めしき

こゝろのやみをいかにせん

哀れつれなの浮世かも

あはれはかなの人の身や

さむるも夢の世の中に

露よりけなる命もて

て、る、日、も、ま、た、ぬ、朝、顔、の

ま、こ、と、の、道、を、打、は、な、れ

あ、は、れ、高、き、も、賤、し、き、も

雲、井、の、庭、も、玉、敷、も

心、の、な、さ、け、ふ、か、く、し、て

わ、ら、や、の、床、も、蓬、生、も

浮、世、の、ち、り、を、立、ち、は、な、れ

つ、れ、な、く、す、て、ゝ、あ、だ、し、世、に

や、を、ら、角、笛、と、り、出、で、ゝ

か、た、へ、の、犬、の、立、つ、な、べ、に

杖、を、あ、げ、つゝ、守、の、男、は

か、へ、り、喜、ぶ、小、羊、の

か、す、か、に、ひ、く、入、相、の

さ、び、し、き、牧、の、夕、ぐ、れ、は

ま、ば、し、の、は、え、を、ま、た、ひ、つ、い

や、み、よ、り、や、み、に、迷、ひ、行、く

足、る、を、し、知、れ、る、心、に、は

う、ら、や、む、こ、と、は、あ、ら、ざ、る、を

中、の、む、つ、び、の、あ、つ、け、ら、ば

つ、ゆ、も、い、と、ひ、は、せ、ぬ、も、の、を

の、ど、け、く、住、め、る、我、宿、を

迷、へ、る、君、が、悲、し、さ、よ』

一、聲、た、か、く、ふ、き、な、せ、ば

羊、の、む、れ、は、販、り、來、ぬ

入、日、の、岡、を、さ、し、行、け、ば

こ、ゑ、も、狭、霧、に、う、も、れ、け、り

鐘、よ、り、外、に、聲、も、な、く

枯、葉、を、わ、た、る、風、寒、し。

俳句

入る月に社の獅子の寝ざめ顔

梓 氷 川

夜更けて嵐に白し天の川